

はあい！

「お元気でしたかあ？」

いや、元気じやない可能性もあるぞ。

「な、なんだって――！」

だつて、あの人があの人が言つていたもの。

「誰？」

ユーモアの皆さんがまさか二巻を買つてくれたんだよ？

「まさか。これはハッカーに頼んで情報を盗み取つたんだよ。誰だつてできる」とさ

いつの間に購入者様はそんなハイテクな技術を。

「正しくは、これこそ本物のライクでいはずですな」

意味わからん。

「相も変わらずこんな感じで進む物語はやがて二巻目になるのであつた」

始まるよ！

さて、諸君らよ。星の法典を作つてみたんだが読みはしないか。

「それ知つてゐる人、すごいよ。マイナーじゃないけど」

そこで読者と質問タイムと名指してこんなお話を持つていたらのコーナーです。

「ぱちぱちい」

嘘でえす！

「をい」

まずは星の法典とは何でしょう！

「知らないよ」

ネットを巡回してもわかる人がいるのかどうか！

「だからわからんって」

あの買取事業で業界NO1のお店にも売っているので是非とも売つてください。まさかこんな羽目になるとは思わなかつた。

「何を言つているの。とりあえず、あの人はこんなにも意味がわからないので、これからを生きるために」

そのCDを僕は手にしたんだ。

「なんか始まつたし、答え言つてるし」

あの日以来景色変わらない。いずれ生まれ出る存在に何を意味したのか今でもよくわからな
いのだ。

「何を言つてんの」

きつとこれからもあなたの隣にいる人を追いかけて、忘れかけたあの日たちを思い出に。私

の見ている夢を僕と置き換えて、あの日を思い出す。

「僕と私の主語を守りましょう」

ずっと手にしたかつた思い出は僕の手に反することをしている。恐ろしいことにこんなにもふざけている世界の真ん中でいつものように僕はいつの日か知っていた事実を言うしかなかつた。

「とりあえず、意味不明なのは頭がファンタジーだからでしょうか。彼女の存在は確かにあつた」

私はずっと自分のことを信じていたんだ。だからいつものように知っていることを全部教えてあげて。そして思い出す、あの日はあの人があれくれたペンダントが作られる時期と少しでも変わらないのはきっとそれだけ心に刻まれたのだろう。

「いずれ知るであろう出来事を、私と僕でこれからも生きていく」

教会の鐘が鳴る。オルゴールが懐古を呼び起こす。追憶の欠片。私はどうして。

「二人だけの結婚式はもう終わる」

神父さんは笑顔で二人を見つめる。

「マリア像は微笑んで神父を見つめる」

そしていつしか二人の結婚式は寂しい世界の真ん中でこんなにも美しく輝くなんて誰しも思わなかつた。

「きっとその存在を知っていたのは神父だけ。笑つてほしいのはいつものことだと、誰に対しても言つていた」

世界は回る。何もしなくともこの世界にはたくさんのことがあるのだと。
「そして私は知つていた。僕は知らなかつた」

たつた二人だけの世界を、これから作つていく。

「世界は回る。そしてこれからを詠んでいて、朗読するかのように世界は呟く」
どうか花畠で遊んでいるいつもの二人に戻りますように。

「そしてそつとお互いはキスをして、家に帰る」

二人の顔に微笑みが灯されていたのはまぎれもなく幸せだと。

「そんな気がしてならなかつたのだ」

僕は。

「そした私は」

幸せです。

「幸せだつたんだ」

少年と少女が大人になつたとき、人は涙を流して見送つた。

「その時を思い出して」

また神父さんは空を仰いで最後の二人はまた創世記の二人になるのだと。

「そう、いつものことのよう教室で思つたそ�だ」

教室に残されたのはたつた一人の人間。

「もういいでしょ」

えーー。でも少しごらいいじやん。

「いつものことよ」

何言つてんの？ 突然。

「私？ 私は○○だよ」

ダレ？

「え、まるまるさんですが」

まさかのそのもの？！

「いいじやん」

いいのか。

「まあ人生沢山あるよ。 いっぱいトイレットペーパーを残してしまつたんだから」

買い物置きしすぎた？

「違う！ この数だけ夢があるんだ！」

トイレットペーパーに夢を馳せててもなあ。

「だからこそ、私は旅立つ。皆さま私を探さないでください」
それでは歌つてもらいましょう。

「失われた日々」

たくさんさんの言葉を以てして答えを探しあぐねた少年が探しているのは何でしょう。

「私のことを知っているのは彼しかいない」

何で歌わないの？

「私のターン。ドロー！」

ふつ、そんなもの簡単に予想できるわ！

「な、そこでオーメンダールだと?!」

うふふ。私の歌詞はこんなにも予想されてしまつたのよ。

「もう何でもありだな」

オーメン！ いつ帰つてくるの？

「ああ、間もなく除夜の鐘が鳴るからその時に」

また会いましよう。

「ええ、ですが」

どうしたのですか？

「私、その気になつたら空……、飛べるんだ」

えつ？

「だから、今こそ伝えたくて。いつも気にしていたあなたの目の前で、やりたかった」

よかつたな。だけど、今の僕には信じられない気持ちがあつて、ちょっとやめてほしい。

「わかつてるの。うん、わかつてる。もうあなたが私の心から離れているってこと。だけど、少しでも思い出にしてもらいたくて」

少しだけ。でもホント、止めてほしいよね。

「だけど、少しだけ。ほんの少しだけ話を聞いてくれないかな」

じゃあ、それを最後にしようか。

「うん。これはね、ある人のことを語っているの」

どんな？

「その人は飛べる人間の目の前で笑っている」

なんだか今の状況に似ているね。

「そしていつも笑顔を絶やすことがなかつた。だから的一人の少女に恋心を持たせてしまった
そうか。なら僕はもうここで。」

「そしたら、飛ぶ姿を見つめて泣いている」

え？

「本当は両想いだということに本人たち以外気づいてないって」

……。

「きっとあなたは素晴らしい人生の第一のスタートの邪魔をされていないのだろうって考えて
いる」

そんなことないさ。ただ君と別れる。ただただそれだけのこと。

「そして私は自分の身元に還るんだと。土に実った想いはいずれ花を咲かせる。私は一人であ
る人の元に行ける」

な、なんだと。

「知っているよね。あなたが一番嫌っている人。私はその人の元で生活させてもらう。それが
最後のあなたに対する証だから」

ふざけるなあ！

「彼は暴力を振るおうとしたが、その人に止められた」

止める。貴様が幸せになることを拒んだのだからこうなる。運命は彼女に回った。

「では行きましょ」

おまえは一生天使という生き物に嫌われて生きていく。それは悪魔に身を染めることだ。

「くそお。貴様を道ずれにしてよかつたものなのに！」

私はあの人頼もしい羽根に手を差し伸べる。あの人はそつと握つて温もりが温かつた。

「お前をおーー！」

いづれ神話になるであろうお話を。

「ここで紹介しましょう」

まず、一人の少年が一人の少女と出会ったことからです。これは――。

「今日も幼い天使たちの学校は続く」

先生は大変な目に遭っているような気がしていますが。

「それはまた別の話になるので」

語りはここで終わりにしますよう。

時々のように思い出すある出来事を思い出したのはどうしてこんなにも楽しいのだろう。

一人語りが長くて、私には何もできないと悔やんでしまうはどうしてだろうと涙を拭いた。
いずれにしろ、人に何もできないのが私なのだとということに気づいた自分が悲しくて虚しか
つた。

あのとき、私が彼を助けてあげることができなかつたのが、今でも悔やまれる。

時は経ち、人は成長することに人の世の中に身を全うすることができる。

何もできなくていた自分がこんなにも楽しい自分なんだと実感した日は幾日か。

私には何もできないはずだつたのに。

そしてこれからも時を放ち続ける、夜空に祈りを捧げるのはどうしてだろう。

私はこんなにも幸せな人なんだと誤解してしまって、修道士と目を合わせる。

ここはある一村の古ぼけた教会の中。私は何もできぬでいた自分が情けなく、その時に神父さんからいた言葉は今でも忘れられない。

「君に一つの雨宿りの船を授けよう、意味は解つていてると思うが」

その船は今の私の目の前でこつくりと泳いでいる。一人で私が涙を流したとき、その船は零を受け皿してくれて。

そういうえばいつの日いか私の世界の中で誰かがその船をいじつているらしく、とてもじやないが笑つている人の言葉を話す人形を見つけてしまうのは難しいけれど、どこにでもいる人の中に、傀儡子がいてもおかしくはないのかも知れない。一人で何をするのかはわからず、そしてこれからもわからないでいるだろうと私はすすり泣く。

「どうしたの。今は楽しいはずなのに」

悲しそうに泣いている私の表情を察したのか修道士の彼女は私の瞳を覗き込んでいる。綺麗な顔だった。

「ちよつとね。今でも後悔していることがあつてね」

「そうなの……。何かあるんだ。なら何かあげようか?」

「そんなものじゃないの。そんなものじゃない」

「そつか」

それつきり彼女は聖像に祈りを捧げている。

私は何もすることなくただただ、この教会を見上げる。

俯瞰した風景は、どこぞの鳥が見た景色と似ていた。

いつか涙を流していた、そのことを絵に描いてみるのも悪くはないな、と、教会へと突き刺す光たちが眩しく輝き、そこに鳥たちが飛んでいた。

いつでもいいからこつちにおいて。

そんなことを言つている気がして少しだけ哀しみが消えてしまった。

なんだかそんな気がした。

祈りを止め、外に出れば晴れやかな空が拡がつていた。

「今日もがんばろつかな」

お腹が空いていることに気づいて、私は表情が緩む。そしてそのままこの村の取引所へと足を運んだ。

なんだ今のは。

「どうしたあ！」

いやね、なんか今のお話にピンとくるものがなくて。

「いやなに、ただのCMですよ」

なんですか？

「いやなに、緊張するだけなのだから、いずれはね」
意味わからんて。

「なんかいいお話をあつたら出来心子も生まれるんじやね？」

おつ、四文字熟語。

「意味は、この日から五日の天使に知つてほしい言葉をあげる、です」
それではゲストどうぞお。

「はい、会話文です。僕のおかげで、登場人物が喋れるんだよ」

どうも、字の文ですう。

「字の文？」

はいい。ギャルっぽく言つてみました。

「な、なにいいい！」

ど、どうした。

「私の名前をどうして知つてるの？ いつも大切にしているあの人気がどこにいるのかもわから

ないのに。いずれはバレるとは思つていたけど」

人のことを馬鹿にするなあ！ 私は貴様を知つてているのだよ。だからそのようなことは造作
でもない。

「な、なんであの人が私を捨てたのよお！」

きつと、あの人気が笑っていたのはそんなことでも良かつたんだよ。

「きつとそんなことを、どこかで話されたのかなあ」

涙を拭いても意味がなく、涙を流した数だけ人は強くなれる。そう信じていた。

「だけど、事実は非情」

涙を流せば、何も産まれはしない。涙を流すことに意味がない。

「だから彼女は泣くことを止めた」

いつの日かそう遠くない未来。

「彼女は掴むその未来に」

彼女だけの未来を知つてほしくて。

「だから、あなたは知つていた。きつと未来は霞んで見えてしまうのだと、教えてもらつたのだから」

そして、また彼女は笑つてありがとうの気持ちを残して。

「これからを過ごしている」

怒つていた時もあれば。

「泣いているときもあり」

喜んでいれば。

「哀しんでいるときもある」

だから彼女の人生にこれからを過ごしてほしい。

「そんなたつた一つの夏休みを」

また過ごしてほしいと。

「この手紙を書いてます」

あの人元へと行こうとしているのは。

「まだまだ先だと思います」

きつとこれからもたくさんのこと経験して。

「たくさんのこと体で覚えていく」

それはまだ確約されていない、ある読書の秋だと呼ばれた、ある一人の記憶と記録——。

「覚えていてくださいね」

ねえねえ。

「どうしたの」

私たちの存在って欠片ほどもないことを教えてくれたのはあの人だつたよね？

「何言つているのよ。いつだって自分のことを信じていたのがあの人だつたんでしょう？」

だけど、生卵は栄養がとてもいいんだよ？

「何！ 貴様、その話本当か！」

「そうそう、そんな感じ。そんぐらいに気持ちを込めて発言するのはすごいことってわかつたでしょ？」

「ほうほう。鳳凰。往々」

何言つてんねん。

「私は全てを知つている。この手でな！」

何を？

「知つてているのよね。ありがとうつてわかつたから」

この手？

「うん、いつものことだつてわかつてた。ずっと泣いている君の記憶が焦がれていますのは私だけじやない」

あ、そつか。もう僕のことを忘れていたんだね。

「そうなんだ。だから、最後にあなたの手を引っ張つていったあの遊園地で遊んだ思い出だけは思い出さないといけないって。そんな気がしたの」

それだけいつも僕のことを想つていたのにどうして思い出せなかつたの？

「そして知つてる。君がいつも私のことを想つていたつてことを」

いつの日かあなたを待つていた。そしてこれからも続くと思われた経験は、そして未来への

素晴らしい体験はあなたをつくつた。

「私は創り者の紛い物。だけど」

だけど？

「それでも愛情というものを知りました。それでも私は笑顔を知りました。それでも私はあります。がどうを知りました。それでも私は涙を流すことができないことを知りました。あなたを失う。それが怖くて、涙が出ません」

そつか。じゃあ、今日からお別れになるんだね。

「嫌なんだけど、私はあの博士から作られ、実験化されたクローリン人間。いずれ知るであろう世界の中でこれからも生きていく。一人で、そしてあなたの思い出の中にいられるのなら」

今日は雨か。じゃあ、僕はもう帰るね。博士。実験は成功。だけど子供を創るなんてことはやめたほうが良いんじゃないのかな。

「私はあなたから去られたら困る」

僕はいつの間にか雨がやんでいることに気づく。何もできない自分が不甲斐ないとも思つたけどそれでも一緒に前を進んでいく、最愛の人から立ち去るのは勇気がいることだけど、それがもし、人ではなく、ただ最愛だけだったら、という僕なりの研究は進んだ。結果、勇気なんて欠片もなかつた。

「待つてよ」

扉を開け放つて、外は土砂降りの雨。僕はあまり器用な人間ではないので何もすることがで
きない。また、ね。

「ありがとう」

少しだけ嗚咽した声が聞こえたのはきっと僕があまり器用ではない証拠だつたのかもしれな
い。

「サヨウナラ」

僕の未来が輝いているのはどこかで聞こえた鳥の声が聞こえたからだろうか――。

もうそろそろ終わりの時間がやつてきました！

「はい。でも長かつたねえ。中途半端に物語を導入すればいいってもんじやない！」
でもそれが趣旨の物語だからねえ。

「どうかこれは物語なのか？」
さあ。

「なんで、そこで本人がさあなの？」

「私にだつてわからぬことがある。

「それはなに？」

あの日、私の全てを奪つていったやつのことを今でも思い出せる。

「やばい。またわけのわからん話が
きつと私の希望もこの世に残されている世界の名がさらされた、あの人の元へと行きたかつ
た。

「早く撤収して！ 強制終了でも可よ！」

私は全てを知っていた。この物語全てに在る共通点があるということを。

「うん？」

必ず、終わりに何かがある。そう、それは！

「とりあえず、気にした私が馬鹿だつた……。あと、三行ぐらいで終わってほしい」

これはテレビなのよ。

「いみわからん。というかわたしのいしきがだんだんときえていく」

私の全てを知ったとき、エールが送られてきた。私は私である限り戦い続ける。

「いつの日かなんて言わないよ」

この物語の終着駅は必ずしも感動ではない。

「どうか感動とかあつたの？」

だけど、良い話があつたら、少しでも笑顔になるんならそれはそれで助かるの。だから読者の皆さんに伝えたい。

「何を言つているんだ！」

この物語を読んで感動してくれましたか？

「やばい。いきなり核心をついてしまつていいし」

感動したり笑つたり、あ、これいいな、等の声が上がると大変うれしいのです。

「何を言つていい」

私は幸せでした。だからこれからも幸せでいてほしい。これからもずっとずっと。

「はい。終わりね。読者のみなさん。こんなわけのわからないものを買つてしまつたことを後悔していなければ良いのですが。とりあえず、こんな感じで終わらせていただきます」

きっとそんな幸せを私は届ける。笑顔とその傍で笑つていい、世界のなにもかもを私は知つていい。だから。

「楽しんでいただけだのなら、作者冥利に尽くるというものです。私たちが行つた馬鹿な行為を少しでもホツとする時間になれば幸いかと。では、またの作品でお待ちしています！」

私は貴女を愛しています——。

「では！」

私はありがとうございましたと伝えたかつたから。その続きはまたあるからね。ホントにありがとうございます！

「ありがとうございます！」
ございましたあ！